博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏	張　勝蘭
論　文　題　目	苗族における伝統社会の変遷とアイデンティティー貴州高坡苗族を中心にー

審査要旨

苗族は中国南部における代表的な少数民族である。その苗族が中華人民共和国成立後に一つの民族として識別された大きな理由は、「苗」と呼ばれる集団が古くから存在するとみなされたからである。しかし、苗族は文字を持たず、その歴史を記述しているのは漢字文献である。本論文はこの漢字文献を史料批判によって再検討すると共に、文化人類学の方法を導入し、苗族が最も集中する貴州中心部の高坡苗族の伝統社会とその文化の変遷過程を解明しようとしたものである。各章の内容は以下の通りである。

序章　苗族が現在においてもなぜ重層的な「苗族アイデンティティ」を再構築しつつあるのかを究明するために、その歴史プロセスを再検討すべきであること、すなわち、識別された「苗族」及びその内部に存在する様々なサブグループ、その独自性と多様性が形成された歴史文脈を理解しなければならないことを本研究の問題意識を提示する。

第一章「漢字文献における「苗」の記述と苗族アイデンティティ形成の歴史背景」　苗族の祖先は『尚書』などにみえる「三苗」とされている。しかしその名は後に消え、南宋以降の文献に「苗」としてみえるようになる。それは「苗」の呼称が漢人側からなされた非漢人との間の「境界線」であることを示すものである。歴史的に言えば、明代に「苗」の中心部の貴州に「省」が置かれたとき、それまでの「蛮」に代わって「苗」が南部非漢人の総称となり、清代になると様々なサブグループに細分化され、現在の苗族に繋がったのである。

第二章「清朝の対「苗」政策と「苗」伝統社会のリーダー――苗族アイデンティティの重層性の再考ー」　中国南部の少数民族に対する清朝の政策は、改土帰流、保甲制度の実施などの直接統治によって強化された。こうした清朝の統治によって、苗族では伝統社会のリーダーの一部が、その支配体制の中に組み込まれて「官」的性格を持つようになる。しかし依然として伝統的価値観を保持するリーダーも存在した。こうした清朝の政治体制内のエリート層と伝統社会内部のエリート層が併存する状況が、清朝体制内の「苗」のアイデンティティの形成と、地域的なアイデンティティの形成に大きな影響を与えた。

第三章「中曹謝氏土司から見る貴州高坡苗族伝統社会の変遷―「卡上」地域ー」　元代以降になると、「苗」が正史に現れ、貴州中心部の「苗」の朝貢記事がみえるようになる。この「苗」は明代の文献に「諸種蛮夷の首」と記され、「東苗」はその代表的サブグループで、現在の高坡苗族がその子孫である。高坡苗族は貴陽一帯に分布し、その地域では苗族の伝統文化がよく保存されている。しかしその内部には「卡上」・「卡下」という地域区分が存在し、その伝統文化にも大きな違いがある。それは両地域における統治の歴史を反映する。すなわち、清代に高坡郷一帯が「卡上」・「卡下」に分かれると、その土司による統治にも大きな相違が生まれた。明末、高坡郷一帯は中曹謝氏の管轄下にあったが、清代になると「卡上」が中曹謝氏の管轄下に、「卡下」が青岩班氏等の管轄下に置かれた。そのため高坡郷一帯はそれぞれの土司を介して中国王朝との政治的関係が生まれ、両者の間に相異なる政治・経済・文化的空間が生まれた。

第四章「青岩班氏土司と碑文から見る貴州高坡苗族伝統社会の変遷ー「卡下」地域ー」　明代に青岩が要所となると、高坡郷一帯にも影響が及んだ。青岩班氏は衛所土司として軍事的役割が強かった。しかし清の衛所改革でその軍事的機能が廃止されると、「卡下」を管轄する班氏の統治は租税徴収に重点が移ってゆく。そのため「卡下」のリーダーたちは、租税の徴収や土地紛争において仲裁的役割を果たすようになり、苗族の伝統社会組織が強化された。

氏名　張　勝蘭

第五章「「敲牛祭祖」から見る貴州高坡苗族伝統社会とそのアイデンティティ」　祖先祭祀は苗族の伝統社会を支える重要な儀礼である。高坡苗族の「敲牛祭祖」は、「卡上」・「卡下」の間で相違があるが、伝統の中核として高坡苗族を維持してきた。それは漢族が高坡苗族という境界に入り込む上で、祭祖が重要な儀式となっているからである。そこでは「卡上」「卡下」共に「父子連名」による「祭祀文」が重んじられ、漢族が苗族にかわるときには必ず苗族の名を貰ってその伝統を受け継ぐシステムになっている。苗族も漢族もこの「敲牛祭祖」を通して高坡苗族となっていくのである。

付論「文化表象から見る苗族伝統社会の変遷とアイデンティティ―伝統服飾文化を事例に―」　熟苗・生苗の視点から、熟苗の高坡苗族の検討に加えて、生苗の貴州東南部の苗族を、服飾文化から苗族社会及び苗族アイデンティティの変遷について考察する。

終章　以上の検討結果を整理して確認する。

本論文は現在苗族が最も集中する貴州中心部に居住する東苗の子孫の高坡苗族を主たる対象として、直接統治した末端土司に焦点を当て、文献史料の他、フィールド調査によるさまざまなレベルの情報、すなわち口頭伝承、儀礼、石刻碑文、族譜などの調査結果を重ねて、高坡苗族の伝統社会とその文化の変遷過程を詳細かつ具体的に分析したものである。その検討によって、中国王朝（国家）という最大の「他者」との関わりの中で、苗族伝統社会のリーダーの動向がその内部社会に大きな影響を与え、重層的なアイデンティティの構築に深く関わってきたこと、および高坡苗族のような熟蛮化した苗族が末端土司を介して中国王朝と政治的関係を持ったことで相異なる政治・経済空間が生まれ、そのような空間的分割が高坡苗族の伝統社会と文化に差異を生んだことを明らかにしている。このように、中国王朝・漢人社会をはじめ、それらの相互作用の分析を通して南部少数民族の独自性と多様性を理解し、その形成とアイデンティティを再考することは、華南世界ひいては東南アジア世界の多元性を解明する重要な作業であることを結論とする。公開審査会では全員一致で博士学位の授与にふさわしい論文であると評価された。

公開審査会開催日	2020 年　1 月　19 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	工藤　元男	中国古代史	博士（早稲田大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	柳澤　明	近世東アジア史	
審査委員	学習院大学文学部・教授	武内　房司	中国近代史	
審査委員				
審査委員				